

踊字の沿革續貂

小林芳規

一、はしきがき

踊字についての説明には、明治時代以後、吉澤義則博士・橋本進吉博士・春日政治博士・遠藤嘉基博士の言及があるが、その沿革について、多くの訓點資料に基き具體的に論ぜられたものとしては、中田祝夫博士の「假名疊用符號の沿革」^⑤が擧げられる。中田博士の論旨は、同博士の要約によれば次の如くである（注5掲載書六二四頁）。

(一) 平假名および片假名における一字の疊字は、漢字の疊字に起源してゐて、古今同一で變遷が無かった。

(二) 漢字の疊用に萬々歳々および萬歳々々の兩様式があるが、平假名および片假名もこの兩手法を襲つて、「い、よ、い、よ、い、よ」、「い、よ、い、よ、い、よ」の疊用音符を用ゐた。

(三) 片假名の「イヨ、」は平安朝以降用ゐられなくして減んだ。

(四) 片假名の「イ、ヨ、」は平安中期より漸次「ノ」の形に變化し始めた。これはまだ上下不均整のものである。平假名の「い、よ、」は連綿體のために「ノ」の姿となった。この形が平假名に現はれたために、片假名の兩點が誘はれて短線に漸次伸長したらしい。

(五) 平假名の「いよ、」は「ノ」に進み、上下均整の姿を示すに至る。しかしてこれが平假名の「ノ」の如き不均整なる姿に働きかけて、漸次これを變形せしめ、また片假名の「ノ、」を誘つて均整なる形に導いた。

(丙) 片假名の「イ、ヨ、」を「イヨ、」に誘導したのは、平假名の連糸體の疊字の力であり、この「ノ、」を更に均整のある「ノ」にまで誘導したのも、また平假名の連糸體の力であった。

(四) すなはち、平假名の連糸體の疊字が主働的であつて、片假名の疊字は平假名の模倣に過ぎないことがわかる。さればこそ追隨的な片假名の疊字と平假名の疊字とが、遂に今日の如く同形となつたのである。平假名および片假名が、ともに同一の「ノ」を用ゐるといふ現象は、決して偶然の結果ではない。

(五) 片假名の「イヨ、」式の疊字が、鎌倉期に入るまでに減んだといふ理由は、平假名の疊字が、主働的であつた事實によつて解釋され得る。平假名では、平安後期に降れば、「、」の如き二點の疊字が、連綿體の影響により「ノ」の形にまで進化を遂げたのであつた。すなはち結果として、「、」の二點の疊字は、平假名においては廢減されることになつたのである。されば平假名を模倣追隨してゐた片假名も、早晚平假名に用ゐられなくなった「、」を放棄するに至つたのである。

以上八項の中、先ず、(四)は假名における二字疊字の起源に關する説で、橋本進吉博士の御説を、奈良時代の漢字資料を始め平安時代の假名資料によつて具體的に證せられた。(四)(丙)は「ノ」(二字踊字の一筆書き)の推移について、上下均整という見地より觀察し、不均整から均整への變形の姿として捉えられたもので、平假名の連綿體が片假名をも導いた、とされた。この御説は多くの訓點資料や平假名資料を駆使された好論であるが、更に他の資料をも補つてそれの形態を仔細に比較検討した結果、二字の踊字には、起筆部の位置の高低という見地からも、時代の推移に従つて一定方向に變化している事實の捉えられることが判明した。しかし、中田博士が多くの時間と努力とを以て解明された疊字の沿革の大綱に對しては、附け加える所は少く、まことに續くに狗尾を以てする説を甘受しなければならぬ。

二字踊字と同様に、三字以上の踊字があるが、その推移は二字の場合と大同であり、しかも、用例が二字の場合ほどには多く拾われないので、本稿では二字の踊字に焦點をあてることにする。

二、訓點資料における二字踊字の推移

〔平安時代における起筆位置〕

訓點資料によれば、二字踊字の起筆部の位置は、平安時代では假名二字の上字の右傍にあった。その位置は二字踊字の起源に關聯している。この起源については、右掲の如くの中田博士が詳述されている所であるが、以下の考察に必要な點を、新たな用例を補いながら略述することにする。

平安極初期加點の東大寺諷誦文を調べると、二字の踊字に次の二形式が用いられている。

A形式 然每物了々 未_レ十_レ (ワキワキ)

痛 也_レム_レ之 (ヤムヤムシ)

B形式 且間 丁_ツ々々 (カツカツ)

A形式が二字の假名のそれぞれの字の下に重點符を附す形式であるのに對して、B形式は假名二字を書いた次に、その下に重點符を二つ續けて附す形式である。重點符の「ミ」は、後には「ム」で表わされるのが普通である。平安中期初頭加點の岩崎文庫・東山御文庫藏古文尚書延喜頃點にも、

A形式 交 カ、元、 (カモカモ)

滋 ヲ、後、 (マスマス)

B形式 師 ヲ、ろ (モロモロ) (下欄注)

のAB二形式がある。この兩形式の中、平安時代では、A形式に變形が生ずる。

上野精一氏藏漢書楊雄傳天曆二年(九四八)點では、

安_〇歩_ト ○一_フ、ム、レ (ヤウヤウニ)

未だ二つの點であるが、平安後期の資料になると、二つの假名の上字の重點符が、點から短線に成長し始めて次の如くなる。

○南海寄歸内法傳卷四平安後期點

屢^ヲ訖^ニ終^ニ始^ニ ○^シハ (シパンバ)

逾^{ナリ}靜 ○^イヨ (イヨイヨ)

○東大寺圖書館藏法華二十八品略釋延久二年(一〇七〇)點

適^テ聞^ク此^ノ品 ○^タマ (タマタマ)

分^リ眞^ニ倍^{ナリ}然 ○^マサ (マスマス)

○毛利家藏史記呂后本紀延久五年(一〇七三)點

幾^ク危^ニ宗^ノ廟 ○^ホト (ホトホト)

○仁和寺藏蘇磨呼童子經承曆二年(一〇七八)點

微^ク動^ク兩^ノ脣 ○^ヤウ (ヤウヤウク)

この短線化の形式の早い例として、中田博士は正曆二年(九九一)加點の仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌を挙げておられる。

右の形式の上下二つの短線と點とが、一筆に續け書かれた古い例としては、中田博士の指摘された醍醐寺藏法華釋文(眞興。安和二年(九六九)寛弘三年(一〇〇六))が挙げられる。尚、この資料には後例の如く一筆書きでない形式も見られる。

深^クハ^クシ (キラキラシ)

區分^クチ^ク (マチマチ)

以上の、點・短線・一筆書きの三形式は、時代的に新古の關係にあり、同一系列のものが漸次變遷して行く過程を示

すものと見られる。従つて常に、起筆の位置は、二字の假名のの上字にあることになるのである。

院政期に入つても、その前半期には、上字の重點符が短線（或いは長めの線）の形態（a型と呼ぶ）が見え、一筆書きによる踊字（b型と呼ぶ）は當初はa型と併用する状態であるが、漸次、b型が多くなって来る。しかも、共に、起筆部の位置は上字の右傍又は右下である。

○吉水藏成唯識論寛治二年（一〇八八）點

謂、數、憶、持（卷五） ○一、し、ハ、

○前田家藏冥報記長治二年（一一〇五）點

病、愈、困（三四丁ウ） ○一、イ、ヨ、

○高山寺藏虚空藏菩薩所問經嘉承元年（一一〇六）點

盡、十、方、界、所、有、花、鬘（卷七） ○一、フ、ハ、ク、

右の資料はa型のみである。所が、神田喜一郎博士藏白氏文集天永四年（一一一三）點になると、殆どがa型である一方、一例、b型が見られる。

盡 コ、ト、に（卷四、複製本三丁ウ）

(a) 復 ヤ、ヤ、タ（卷三、同 二丁オ）

細、碎、ク、タ、キ（卷四、同 六丁ウ）

輕、カ、ワ、シ、ク（卷四、同 一七丁ウ）

(b) 交、侵、コ、モ（卷三、同 五丁ウ）

楊守敬舊藏本將門記は院政初期頃の加點とされるもので、これにも兩型がある。

(a) 朦々（モ）ナリ（複製本 八頁）

増 **ヨス** (同右 一八頁)

a' 彌 **イヨ** (同右 二四頁)

盡 **トク** (同右 五一頁)

(b) 屢 **リ** (同右 五二頁)

彌 **イヨ** (同右 三九頁)

岩崎文庫藏春秋經傳集解卷十保延五年(一一三九)點ではb型の方の例數が多くなっている。^⑥

(a) 驟 **ト** (覆製本 六丁ウ) ○ **リバ**

(b) 驟 **ト** (同右 三丁ウ) ○ **リバ**

殆 **ト** (同右 五丁ウ) ○ **ホリ**

微 **ト** (同右 二二丁オ) ○ **ヤア**

西南院藏和泉往來文治四年(一一八八)點の二字踊字が、初めの文字から重點符のかかることについては、遠藤嘉基博士が指摘されている。^⑦ 形態は總てb型であるが、

屢 **リ** (一四九行) 適 **ク** (一一三行)

抑 **ソ** (三行) 適 **ク** (一〇行)

の如く、二字の假名の右傍に寄っているものも見られる。無論、

遠 **ロ** (二二九行) 彌 **イヨ** (二二九行)

もある。唐招提寺藏四分律行事鈔朱點も院政後期の加點と見られ、そこにもb型が用いられているが、右の兩様がある。

○輕爾 カロ、シク

兩様共に起筆の位置は上字の右傍又は右下である。以下の資料でも同位置から起筆している。

○九條本文選卷廿承安二年（一一七二）點

數 しゞて 畢 コリクテ

滋 丁ル

○觀智院藏唐大和上東征傳院政期點

伎 ハラテ （複製本 五丁オ）

類 しゞて （同右 二二丁ウ）

○正智院藏佛頂尊勝陀羅尼經院政期點

有 ミヅテ 有 ヲシテ

○仁和寺藏醫心方院政期點

驟 しゞて （卷一） 階 しゞて （卷一）

右の如く、院政期の加點本を通じて、二字踊字の起筆位置は、上字の右傍或いは右下である。但し、次の如き例外が認められる。書陵部藏文鏡祕府論保延四年（一一三八）點に一例であるが、

志 區別 丁オ、 （天、二二丁オ）

の如く、起筆位置が下字の右傍下寄りの例がある。この資料の二字踊字は、上述の諸資料と異なって、全六帖殆どB形式である。

夜 ヨル、 （東一六丁ウ） 數 シハ、 （東二七丁オ）

殆 ホト、 （西一〇丁ウ） 交 コモ、 （西一三丁オ）

踊字の沿革續 貂（小林）

會タマ、 (西二六丁ウ) 偶タマ、 (南 一八丁オ)

殆ホト、 (南一九丁オ) 品シナ、ニスレハ (南三四丁オ)

傍カタ、 (南四七丁オ) 區マチ、 (南 四九丁オ)

會タマ、 (北 九丁オ)

等であり、外には、「逾イヨ」、「北二六丁オ」の一例が認められる程度である。この資料の例外の原因については後に述べる。又、書陵部藏大方廣佛華嚴經卷第四十壽永二年(一一八三)點にも、

悉○以○清○淨○身○語○意○業○ ○コトク

鬼神○悉○皆○遠○離 ○コトク

亦復○如○是○ ○トタク

の如く、二字の假名の下字の右傍下寄りの位置から起筆している例が見え、且つこの資料ではこの形態が大多数であり、諸○音○ ○モツク

の如く下字の右肩部より起筆する例は一例数えるのみである。この本の加點者は五十七歳の老比丘尼心覺で、訓點資料としては珍しく女性の加點した假名である。起筆部が下字の右傍下寄りである理由として、一應、院政末期加點である爲に起筆部の位置が下降したかとも考えられそうであるが、次に述べる如く鎌倉初期には下字の右肩ないしは右傍上寄りから起筆するのが一般であるから、別の原因によると見るべく、恐らく、平假名を常用した女性の加點と係ることであらう。

〔鎌倉時代前半期における起筆位置〕

鎌倉時代の二字踊字は、初期の二、三の例外を除いて、總て一筆書きである。しかして、前期の平安時代と比較して、起筆部の位置が二字の假名の下字の右傍に移っていることが著しい相違である。

先ず、鎌倉初期加點の猿投神社藏古文孝經建久六年（一一九五）點には、

悉ノセタルコト載ニ 本文ニ（二〇頁） ○コト、ク

の如く、起筆が下字の右傍真中よりやや上寄りの邊から始まっており、しかも短線と點とから成る踊字が一例ある。しかし、他は皆上字の右下或いは右傍より起筆する一筆書きである。

驟 シツ （二二頁） 衆 モロ （二二頁）

品 シガエ （四二頁） 條 カサ （六六頁）

この本の調點は本奥によれば、承安四年（一一七四）の清原家説を移寫したものであるから、もとの本に引かれた可能性も考えられるが、鎌倉初期には、平安時代と同じく上字より起筆する形態があったことを示すものであろう。

東大寺圖書館藏釋摩訶衍論承元二年（一一〇八）點では總て下字右傍から起筆する。三例中二例は、下字の右肩の位置から始まり、

洋 洋 ヤウツタリ（二七行） 齋 齋 セウツタリ（二七行）

もう一例は、下字の右傍真中よりやや下寄りの位置から起しているが、この方は短線と點との組合せである。

惘 惘 ハウツ（四行）

東京大學史料編纂所藏南无阿彌陀佛作善集は建仁三年（一一〇三）頃の墨訓があり、二字踊字は、二例が下字の右肩より起筆、二例は下字の右傍真中より下寄りの位置から起筆している。

○佛舎利各六粒（一九行） ○シク

星霜漸積セイサウツツミデ（一五五行） ○ヤウ

○文殊像各一鉢（五二行） ○シク

各丈六鏡一口（九二行） ○シク

高山寺藏股本紀建曆元年(一一二一) 點は、下字の右肩よりの起筆が五例、下字の右傍真中よりやや上寄りの位置よりの起筆が四例拾われる。

○微子數イサムレトモ

○しゞ

益廣沙丘苑臺キウのエンダイにヒロム

○しゞ

○諸侯咸歸スインに

○コトククに

村愈淫亂ナルこと 不ナラ止ナラ

○イヨ

鴨脚光朝氏藏日本書紀第二嘉禎二年(一一三六) 點には、下字の右傍真中よりやや上寄り起筆の一例がある。

吾君猶在(複製本三三丁ウ)

○しゞ

大東急記念文庫藏文集卷四嘉禎四年(一一三八) 點も、總て下字の右傍に起筆部があり、その中、下字の右肩六例、右傍真中より上寄り六例、右傍真中邊一例がある。

(右肩) 翩々 へしタル 梢々 せつてタル

(上寄り) 蕭々 せつてタル 盡 こつて

(真中) 人 ひと

真中起筆の一例は、短線と點との組合せの形態である。古今目録抄は顯真が嘉禎四年(一一三八)から建長頃にかけて書足して行った資料で、下字の右肩やや上から起筆一例、右傍真中より上寄り起筆が三例、やや下寄り一例が見られる。

(右肩) 屢 しゞく

(上寄り) 在 アヒス 適 タシン

(下寄り) 適 タシン

東大寺圖書館藏春華秋月抄草第五延應元年（一二三九）點には、

竺ニスス

があり、起筆位置は、下字の右傍真中かやや下寄りである。

以下の鎌倉初期加點本の二字踊字の形態も右と同様である。

○觀智院藏世俗諺文鎌倉初期點

（右 肩）二例 彬 ヒリリタリト云（覆製本五三丁オ）

且 ナゲゲトス（同右 六丁ウ）

（上寄り）三例 洋々ヤウウトシテ（同右 四五丁オ）

諤々カククトシテ（同右 一七丁ウ）

（真 中）四例 衆 モウウ（同右 四一丁ウ）

愈 イミミ（同右 一六丁オ）

○高山寺藏論語集解鎌倉初期點（清原本）

（右肩の上寄り）恭ウヤヤ（卷八、一四行）

（真中の上寄り）各ヲクク（卷七、六一行）

○高山寺藏周本紀鎌倉初期點

（上寄り） 師 モウウ 交 コモモ（三二一行）

（真中又はやや下寄り）畢 コクク（九三行） 滋 丁ト（一〇三行）

畢 コクク（一〇九行）

鎌倉前半期における二字踊字の起筆部は、右掲の如く、下字の右傍で、真中より上方にあるのが大勢である。これに

對して、鎌倉後半期は、後述の如く、起筆部の位置が變化して下降して來る。そこでその過程を見る爲に、鎌倉中期加點の群書治要清原教隆點九卷について、二字踊字の形態を調べてみる。

〔群書治要教隆點における起筆位置〕

金澤文庫本群書治要經部の九卷は、清原教隆が次の年時に亘って加點している。

建長五年(一二五三) 卷二・卷三

建長六年 卷五

建長七年 卷一・卷六・卷十

康元二年(一二五七) 卷七

正嘉元年(一二五七) 卷九

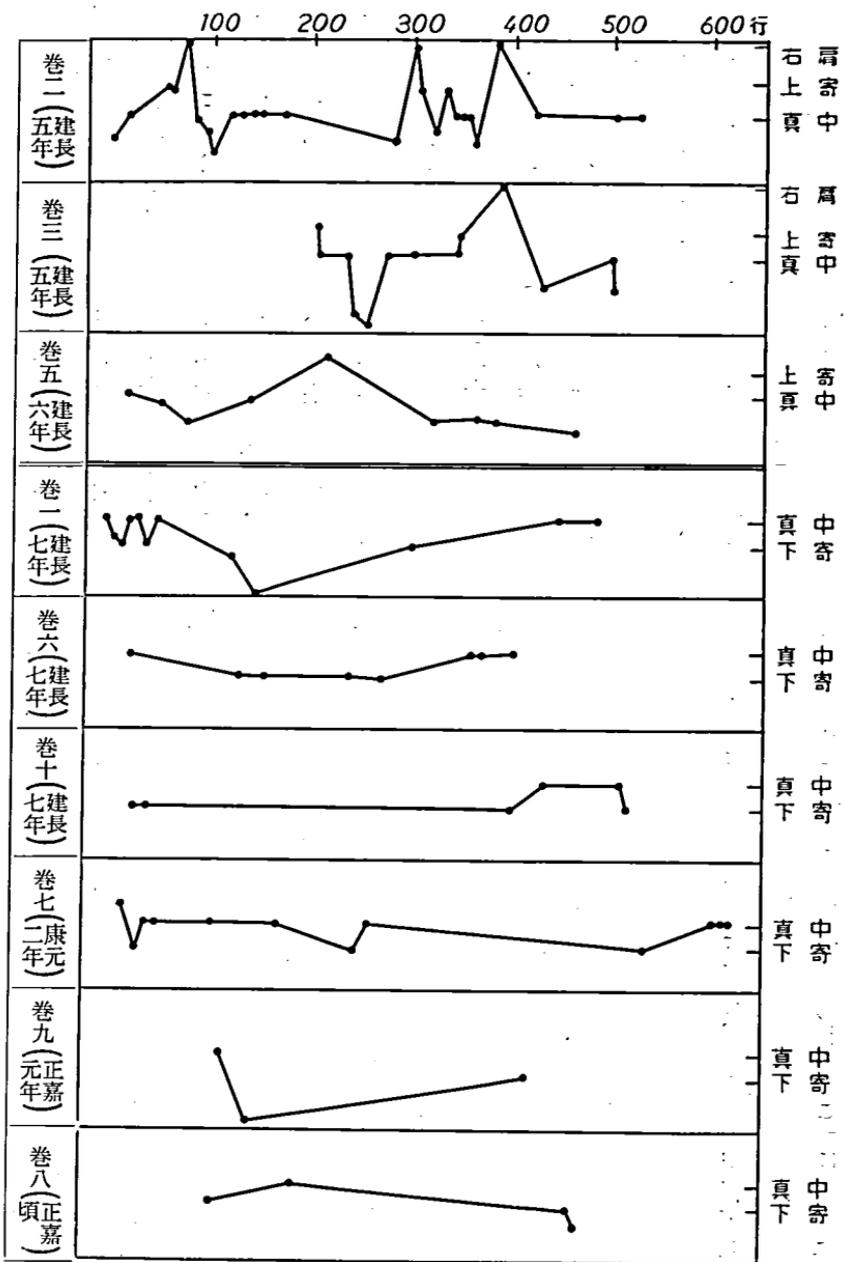
右年時頃 卷八

二字踊字の起筆部の位置の高低について、各巻別に圖示したのが別表である。この圖表は、横に各巻毎の行數を配して、それぞれの巻における二字踊字の所在を示し、縦は各例の起筆部の位置を點で示したものである。表における點の高低は、踊字のある假名二字の中、下字について各假名の縦の長さに対する起筆位置の高低の割合で示した。各巻とも縦の高低は、凡そ、最上端(右肩)・上寄り・真中・下寄り・下端を目安とした。従つてこの表で、各巻の最上端にある點は、その踊字の起筆部が下字の右肩にあることを示す。例えば、卷三(圖表第二段目)における十三例の二字踊字は、卷頭から卷尾に向つて次の順序で用例が現われ、各踊字の起筆位置は括弧内の如くなつてゐる。

207行 聲 コトクノ (「ト」字右傍の真中より上寄り)

208行 盡 コトク (「ト」字右傍の真中)

群書治要清原教隆點における二字踊字の起筆位置



踊字の沿革續貂(小林)

241行	交	コモク	(「モ」字右傍の真中)
242行	盡	ユトククニ	(「ト」字下端のやや上)
251行	龐	ロウクヲリ	(「ウ」字右傍の下端)
271行	卒	コトクニ	(「ト」字右傍の真中)
297行	數	シハクシ	(「ハ」字右傍の真中)
340行	借	シハク	(「ハ」字右傍の真中)
341行	盡	コトクケ	(「ト」字右傍の真中よりやや上寄り)
387行	屢	シハク	(「ハ」字の右肩)
432行	交	ユモク	(「モ」字右傍の下寄り)
492行	卒	コトクケ	(「ト」字右傍の真中)
494行	盡	コトクク	(「ト」字右傍の下寄り)

この圖表から次の事が判る。

- (1) 各巻を通じて、下字右傍の真中よりの起筆が多い。
- (2) 下字右傍の、真中よりも上方位置から起筆する例は、建長五年及び六年の加點の巻に見られ、教隆點の中で早い時期の加點に屬する。特に最初に加點した卷二に比較的多い。
- (3) 建長七年以後加點の六巻では、起筆位置は下字右傍の真中か下寄りに安定する傾向が認められる。これに對して加點の早い期の建長五年點(卷二・卷三)では動搖がある。

これらは、本資料の踊字の形態が、鎌倉時代の前半期から後半期にかけて變形する過渡の様相の一面を示していると考えられる。

〔鎌倉時代後半期における起筆位置〕

書院部藏金澤文庫本春秋經傳集解は、教隆の子、清原直隆と俊隆等が、教隆の傳えた家説によって文永五年（一二二六）及び六年に加點したものである。その踊字は、殆ど下字右傍の眞中より下寄りの位置から起筆している。

周禮 盡ア在ナリ（卷二） ○コトクノクニ

周鄭 交ア惡シ（ノ） ○コトモク

隈爾寺藏論語集解卷七文永五年・七年點は中原家説を傳える。その踊字は、

抑オ亦モ以テ爲ス次ト矣ト（六六行） ○ソモク

庶シ矣ト哉ト（二三行） ○モク

があり、前例が下寄りの起筆、後例は下字右肩よりの起筆である。内藤乾吉氏藏古文孝經仁治二年（一二四一）識語本は、同文識語を含む松岡忠良氏藏古文孝經寛元五年（一二四七）本と比較して、教隆點の移點本であることが知られるが、二字踊字の形態も、

（右傍の眞中起筆） 各ツノク（六六行） 醜モワク（四三〇行）

（右傍の下寄り起筆） 品シナクニス（二三三行） 交コモク（三三三行）

の如くで、仁治よりやや後の様相を示している。

貞觀政要建治三年（一二七七）點には右述の形態の外に新たなものが見られ注意される。この資料の二字踊字の起筆部は、下字右傍の眞中より下寄りのものが多い。しかし稀には眞中より上寄り例も見られる。

（下寄り） 盡ナ爲ス他タ人ノ之ハ有リ（卷一、一一〇行） ○コトクノクニ

儻○ (卷一、二七二行) ○||タテ
 (上寄り) 悉○為ナリメクキヒトニ鬼魅ヒト (卷一、三三二行) ○||コトヲド

所が、新たに、

(下 端) 心○逾ケウダニシ騎ケウダニシ大ニシ (卷一、四四二行) ○||イヨク
 階下儻○ (卷一、二二二行) ○||タテク

の如く、下字の右傍下端から起筆する例が見えて来る。三千院藏古文孝經建治三年點も同様であって、

愛敬○交通トウツ (覆製本一五丁オ) ○||フモク
 醜○不レ争ソウ (同右 二八丁ウ) ○||モロク
 騷歌○南風ウダラ (同右 四丁オ) ○||コトク

の如く下字の右傍下端から起筆する例が認められる。但し、一方では、

咸○コトク (二丁ウ) 交○コモク (二六丁オ)

の如く真中より下寄り位置で起筆するものもあり、兩形が併用されている。

さて鎌倉後期の資料には、この下字の右傍下端より起筆する形態が認められ、真中より下寄り位置起筆の形態と併用するのが一般である。

○金澤文庫藏弘決外典鈔弘安七年(一一八四)點

(下 端) 快々○アウ○トシテ (卷一) 轉○イヨク (卷一)
 數○シハク (卷一)
 (下寄り) 數○シツ (卷一) 畢○コトク (卷一)

○書陵部藏古文孝經永仁七年(一一九九)點

(下 端) 驟 しゝ (五丁オ) 諸 モロ (四丁ウ)

家 イ (三四丁ウ)

(下 寄 り) 醜 モロ (三一丁オ) 咸 コトクニ (三丁オ)

品 しヲトナシ (一九丁オ)

この資料では、下端起筆が多い。

○梅澤彦太郎氏藏本朝文粹正安元年 (二二九九) 點

(下 端) 盡 コトクニ 彌 イヨク

曇々 ルイクトシテ 寂々 セキクドリ

下端起筆の例ばかりである。

○高山寺藏論語集解嘉元々年 (一三〇三) 點 (中原本)

(下 端) 恭 ウヤクシ (卷八、一三行)

(下 寄 り) 歌 ウタクフ時ニテ (卷四、六四行) 約 セツクシケトモ (卷四、四七行)

抑 ソモ (卷四、六八行)

○神宮徴古館藏古文尚書正和二年 (一三三三) 點

(下 端) 數 しハク (卷二) 庶 モロク (卷二)

(下 寄 り) 咸 コトクニ

下端起筆が多く見られる。

○書陵部藏古文孝經元亨元年 (一三三二) 點

(下 端) 悉 コトクニ 醜 モロ 家 イヨクニ

踊 字 の 沿 革 續 紹 (小林)

(下寄り) 咸 コトクク

下端起筆の例がやはり多い。

○尾張國解文正中二年(一三二五)點

(下 端) 咸 コトクク (覆製本二二丁オ)

(下寄り) 情 ツラク (同右 四丁ウ)

○書陵部藏古文孝經元徳二年(一三三〇)點

(下 端) 條 オチク 交 コモク

(下寄り) 醜 モラク 悉 コトリク

○觀智院藏作文大體鎌倉後期點

(下 端) 胶 ナウク

(下寄り) 盡 コトクク

○書陵部藏臣軌鎌倉期點

(下 端) 逾 イヨク

(下寄り) 數 シク

但し、岩崎文庫藏古文尚書元徳二年(一三三〇)點は、

諸モツクの (九行) 咸 コトリクに (五三行)

右傍真中よりやや上寄りで起筆する例で、右掲の諸資料に比較すれば、例外的である。

南北朝期は、二字踊字の形態においても、鎌倉後期とほぼ大同と見られる。

大東急記念文庫藏論語集解建武四年(一三三七)點は、下端起筆の「歌ウタクフキにして」もあり、稀には上寄り起

筆の「屢しづく」(卷三)もあるが、下寄り起筆の、

抑ソモク (卷一) 恭ウヤクシク (卷八)

が多く用いられている。又、醍醐寺藏遊仙窟康永三年(一三三四)點は、殆どが、下寄り起筆である。

時々ヨリク (三丁オ) 方ハキト (二九丁ウ)

この資料は正安二年(一三〇〇)の模寫本である。

右のようなやや古體を傳える資料もあるが、多くは、起筆部が下字の右傍下端にある。

○眞福寺藏遊仙窟文和二年(一三五三)點

○猿投神社藏論語集解康安二年(一三六二)點

○斯道文庫藏帝範應安元年(一三六八)點

○書陵部藏老子至徳三年(一三八六)點

等は、下端起筆が一般の形態となっている。但し、その中で、少数乍ら、

時々ヨリク (遊仙窟文和點、八頁)

數シハク (同右 三一頁)

の如く、二字躡字が、下字から離れて、更に下方から起筆した例も見え初めている。

〔室町時代における起筆位置〕

書寫山住侶心空開板の倭點法華經は、古典全集本に應永五年(一三九八)重刻本が収められている。その二字躡字の

形態は、

(下寄り) 悉コトク (五ノ五) 有マシクテ (六ノ二二)

(下端) 有マシクキ (七ノ二七) 有マシクキ (八ノ一四)

躡字の沿革續貂(小林)

(離れ) 數數 しハフ (五ノ二二)

の三様が見られるが、下寄り起筆例は、嘉慶二年(一三八七)頃の初刊本と係り、鎌倉後半期の形態に通うものである。書陵部藏六臣注文選應永三十四年點には、

(下端) 區 マチ (卷五十六) 旁 カタ (卷五十六)

幾 ホトクニ (卷五十七)

(離れ) 驟 しハフ (卷五十七)

の二様が見られ、しかも形態が「フ」の如く終畫を左斜めに流した形が目附いて来る。書陵部藏古文孝經文龜三年(二五〇三)點も、下端起筆で「フ」が用いられている。

咸 コトクニ 醜 モロクニ 家 イハクニ 條 ヲナクニ

以下にも下端起筆の形態が見える。

○静嘉堂文庫藏毛詩永正十八年(一五二二)點

盡 コトク (卷一桃夭)

○龍門文庫藏長恨歌琵琶行清原宣賢點

且 カツ (七丁ウ) 會 ムク (一五丁ウ) 續々 ツク (一七丁ウ)

○醍醐寺藏指微韻鏡私享祿五年(一五三二)點

月 ツキ (二丁オ) 盡 コトク (二四丁オ)

前田家藏桂川地藏記弘治四年(一五五八)點は、下端起筆の「屢シフ」(六丁オ)、「買賣ハフ」(二丁ウ)の如き形態が多いが、尚外に、

(下寄り) 屢 シフ (二丁ウ) 區々 ミナクム (七丁ウ)

もあり、又、下字から離れた形態も多くなっている。

離々 ロウロウシル (一四丁ウ) 耿々 カウカウシル (一四丁オ)

漫々 ミンミンシル (一四丁オ) 相輕 カロクシク (一八丁ウ)

數々 サクク (一九丁オ) 續々 ツキク (二〇丁オ)

漸々 ツサク (二〇丁ウ)

次掲の資料にも右の三様の形態が見られる。

○書陵部藏三條西實隆書寫本史記

(下寄り) 悉 コトクニ (秦本紀) 畢 コトクニ (同上)

(下 端) 畢 コトクニ (五帝本紀) 衆 エロク (殷本紀)

(離 れ) 輕 カルクシノ (秦本紀) 數 レハク (秦本紀)

○静嘉堂文庫藏古文尚書室町初期點

(下寄り) 咸 コトクノ (卷一) 師 モロク (卷一)

(下 端) 衆 モロク (卷四) 咸 コトク (卷五)

條 オチク (卷五)

(離 れ) 夫人 ヒトク (卷十一)

○足利學校遺跡圖書館藏孝經直解室町期點

(下寄り) 家 イヤニ (二五丁オ) 恭 ウヤシク (二三丁オ)

(下 端) 弟 シトシル (一六丁ウ) 差 レナシス (一七丁ウ)

(離 れ) 驟 レハク (九丁ウ) 交 コモク (二〇丁オ)

室町時代における二字踊字の形態は、右述の如く鎌倉後半期に見られる形態を使用しながらも、新たに下字から離れた形態が見られること、「くく」の形態が屢々見られること等に特徴を見取ることが出来る。

三、片假名文における二字踊字

片假名文は、その成立上、訓點所用の片假名と密接な関係を持っている。従って二字踊字において、片假名文も訓點資料で見たのとはほぼ同様な時代的推移を示している。

院政時代の資料では、起筆位置は上字の右傍である。山口光圓氏藏打聞集は、長承三年(一一三四)の書寫と見られるもので、踊字は、

増イヨ、賢キワサツルト(一二丁オ)

倍イヨ、逸フキテ(一二丁ウ)

ナカ、其後ニ頭毛フトリテ(一二丁オ)

とあり、法隆寺藏法華一百座聞書抄院政末期書寫本も同趣である。^⑧

イマ、ハ、ノ、ト

モ、ワ、ノ、タ、カ、ウ

智母トテ、シ、セト

イ、ヨ、道心堅固ニシテ

さて鎌倉期においては、起筆位置が下字の右傍になる。しかもその初期には、下字の右肩より起筆している。圖書寮本寶物集(傳康頼自筆本)には、次の如くある。

ヨク、カタラヒツク

トク、トカク

ア、ト、ニ、ツ、ケ、テ、ハ、

大福光寺本方丈記は、川瀬一馬博士によって長明自筆本とされたものであるが、踊字の形態は、次の如き形態を示している。

(右傍の真中) ㇗㇗㇗ (七七行)

㇗㇗㇗ (一〇八行)

㇗㇗㇗ (二四一行)

(真中よりやや上) ㇗㇗㇗ (二三二行)

㇗㇗㇗ (一九行)

㇗㇗㇗ (二二〇行)

(真中よりやや下) ㇗㇗㇗ (二四三行)

㇗㇗㇗ (二七四行)

観智院本三寶繪は文永十年(一二七二)書寫で、起筆位置は、右傍真中又は上寄りである。

○ ㇗㇗㇗ (卷中)

○ イヨ㇗㇗ (卷中・卷下) ヨ㇗㇗㇗ (卷中)

鎌倉後期書寫の古今訓點抄嘉元三年(一二三〇五)寫本の踊字の起筆位置は、下寄りであり、

雪ノ ㇗㇗㇗

又、高山寺藏受法用心集正和二年(一二三三)寫本でも、

㇗㇗㇗㇗㇗㇗ ヨ㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗

の如く下寄り起筆である。東洋文庫藏明恵上人歌集でも、

㇗㇗㇗㇗㇗㇗ ト㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗ ㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗㇗

㇗㇗㇗㇗

等下寄りが多く、時に「オノ」の如く、下端よりやや上に起筆位置がある例もあり、踊字の形態は、鎌倉中期以降後半期の様相を示している。

四、二字踊字の形態變遷の原因等

平假名文は、殆どが書寫年時を明確に示さず、しかも物語・和歌等の和文學作品では轉寫を一再ならず經たものが大部分なので、本稿の如き表記を主對象とする研究資料としては、片假名の場合に比べて、困難が多い。又、平假名の踊字については中田博士が論ぜられた所でもあるので詳述を避けるが、二字踊字の起筆位置の變遷は、片假名の場合と一面ではほぼ同様な推移を辿ったと考えられる。しかし小異の面もあったらしい。

平假名による文學作品の嚆矢とされる、土左日記は、幸いに貫之の自筆本の面影を傳える青谿書屋本が現存している。この本は成程、假名遣・漢字の使用状態等の表記面から見ても承平(九三一—九三八)頃の様相を窺わしめるものであるが、爲家の轉寫本を近世に再轉寫した經過は、二字踊字の形態にも反映している。

① いゝ (二頁3・八頁1・四四頁9)

ま (二二頁4) ゝ (五四頁1)

は (六九頁7)

② いゝ (九頁3) しは (三三頁3)

③ いゝ (一〇頁9・二二頁7・二八頁9)

ま (二五頁3) ゝ (六三頁1)

①の起筆位置が下端である形態が最も多く、しかも、②の如く、起筆位置が下字から離れてしまった形態も散見するのである。このような起筆位置を、康保三年(九六六)頃書寫の石山寺藏虚空藏菩薩念誦次第紙背假名消息の二字踊字と比較すれば、明かに相違することが判る。即ちここには①②の形態は見られず、

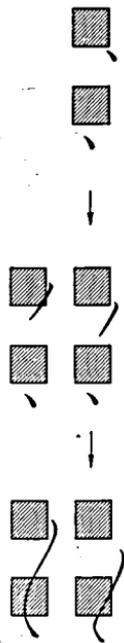
③ しは (三三頁3)

㊦ しほくとうんせ

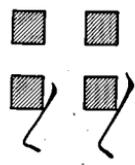
の二様のみである。前者㊥は起筆位置が上字右肩にある。二字踊字の起筆が上字からかかる形態は平安時代の他の平假名文にも見る所で、同時代の片假名の場合に相通する。一方、右掲の㊦は恐らく平假名文の「□□、、」から直接に起源するものであろうが、この下字から起筆する形態が、片假名においては、平安時代には一般的でない。これは、二字踊字における、上字起筆のA形式と並んで、平安時代の片假名ではB形式の「□□、、」が用いられ、しかもこのB形式は、依然として二つの重点符であって短線になっていない事と、密接な関係があると考えられる。但し、先に例外として指摘した、文鏡秘府論保延四年點の「丁チ、」（下字「チ」の右傍下寄りから起筆）は、この資料の二字踊字が殆ど「□□、、」のB形式であることから見て、漸く片假名の世界で、B形式からも、短線化、やがては一筆書きの二字踊字が生ずる走りを示すものかも知れない。

以上、片假名資料における、二字踊字の形態を、起筆位置の高低という観点から、その變遷を眺めて來たのであるが、起筆位置と時代との關係を纏めると凡そ次の如くなる。

1 上字の右傍より起筆（平安時代）



2 下字の右傍で、真中より上寄り又は右肩から起筆（鎌倉時代前半期）



3 下字の右傍真中ないしは下寄りから起筆(鎌倉時代中後期)



4 下字の右傍で、下端より起筆(鎌倉後期以降)



5 下字の下に離れた位置より起筆(南北朝期から散見、室町時代に多く見る)



鎌倉後半期以降は、それぞれ前代からの形態をも用い、新形態と併用している。

右の諸例が示す如く、二字踊字の起筆位置の變遷は、時間の推移に従って一定の時期を劃し乍ら行われた事象で、個人差を越え、又漢籍と佛書・國書という資料や系統の相違には殆ど係りなく、國語史上の一般的な事象として把えることが出来るのである。

してみると、これが變遷の原因は、一体如何なる所にあるのであろうか。特に、平安時代と鎌倉時代との間には、起筆位置が上字の右傍から下字の右傍へと移り、截然とした相違が認められる。常に例外の豫想される表記史において、かくの如き顯著な事實のあることには、然るべき理由が考えられなければならない。現段階において、それを動かした外的權威の如きものは考え難い。従って、踊字そのものの中に原因を求めてみる必要がある。

踊字使用の推移の中で、平安時代と鎌倉時代との間に相違のあったものに、B形式の「□□、」がある。即ち、B形式の踊字は、鎌倉時代以後は殆ど用いられなくなった事實がある。この事は、先述の要約に掲げた如く、中田博士が既に指摘しておられる。但し、B形式は、鎌倉時代にも次の如く用いられた資料があり、皆無ではない。

○叡山文庫藏息心抄建久二年(一一九一)點

惡禽屢 現シテ

其葉アラ、シキ木アリ

○日本書紀第二嘉禎二年（一一三六）點

每 道前 餉之故

○古今目録抄嘉禎四年頃點

能々 可レ尋（上卷、日本書紀引用部分）

○池田庄太郎氏藏十七條憲法嘉禎三年點

與レ衆モロミト宜レ論

與 衆モロミト相 辨

○高山寺藏周本紀鎌倉初期點

諸侯 成 會

○書陵部藏白氏文集卷三、元亨四年（一一三四）點

令 夏 夏 交 侵 上（法曲）

空 舞 數 唱 此 歌（胡旋女）

且 圖（折臂翁）

この資料の二字踊字はこのB形式のみである。本奥に、菅原爲長の侍讀本と長久二年（一〇四二）の藤原正家の家説とを傳えた記事がある。

これらは鎌倉初期點本か、日本書紀や古態を傳えた漢籍等で、擬古的な用法と見られる例外であり、當時の一般には

見られないものである。さすれば、平安時代に用いられていた、B形式の「 \square 、 \square 、 \square 」は、鎌倉時代にはどうなったのであろうか。鎌倉時代に入るや忽然として消えたとするよりも、むしろ、他の形態に變容したと考えるべきであらう。事實、鎌倉初期にその過程を示すと見られる用例があるのである。先に鎌倉初期の項において、古文孝經建久六年點・釋摩訶衍論承元二年點・白氏文集嘉禎四年點に「 \square 、 \square 、 \square 」の形態が例外的に存することを指摘した。この形態は、次の二點において平安時代成立のA形式「 \square 、 \square 」とは關聯が見出せない。第一に、A形式は平安時代に上字の重點符が點から短線化し更に一筆書きに變容し來り、院政時代後半には一筆書きが完成している。鎌倉時代前半期にも、下字の右肩から起筆する形式の二字踊字は必ず一筆書きである。従つてこの兩者は同形式のもので、平安時代から鎌倉時代へと同一延長線上にある、A形式と見られる。これに對して、右の短線と點との組合せ例は、A形式の方では既に一筆書きの完成化が終つた後の鎌倉初期に見られる所から、A形式とは別系の形式の變容と想定される。第二に、右の鎌倉初期點本に見られる、短線と點との二字踊字の短線の起筆位置は、下字の右傍真中より下寄りである。A形式の二字踊字の起筆位置は、鎌倉時代初期には、下字の右肩にあり、下字の下寄りから起筆するのは中期以降である。従つてこの點でも、平安時代に上字右傍から起筆したA形式と直接結びつかない。そこで、二字踊字でA形式とは別の形式たる「 \square 、 \square 、 \square 」のB形式が顧みられて來る。B形式は、院政期まで變容が殆どなく用いられて來たものである。このB形式の上の方の重點符が變容を始めるとすれば、その形態はA形式の先例が示す如く、短線化→一筆書きとなるであらう。又、起筆位置は、假名二字の下字の右下端か或いは下端よりやや上の邊となる(その先例もA形式の方が既に示している)。さすれば、鎌倉初期點本に見られた「 \square 、 \square 、 \square 」は、B形式の變容する一過程を示すものと考えられるのである。しかしこの方は例も少く、主流はA系統の方にあつたことを諸例が示している。

B形式が鎌倉期になつて變容を始めた原因は、恐らく、既に完成したA形式に影響されて、之に一步遅れ乍らも、形態を一筆書きへ整えようとしたことにあるのであらう。しかし反面、起筆を下字の下端部より始めるB形式に引かれ

て、主流たるA形式も、起筆位置を上字から下字へ下げて来たものではあるまいか。かくて起筆位置が下字に移った主流は、時と共に漸次起筆位置が下降して行ったものと考えられる。鎌倉時代以降、二字踊字の起筆位置が下降した原因は、恐らく、人間の書記努力の軽減化の力が無意識の裡に働いたもので、假名二字を書いた上で再び紙面の上方に戻って踊字を書起すよりも、下字そのものから、しかもなるべく下部の方から起筆する方が楽であったからであろう。平安時代から鎌倉・室町時代へかけての、二字踊字の起筆部の變遷には、このような事情が根柢に働いていたと考えられる。かかる言語における身體上の努力の軽減化が、言語變遷の原因となることについては、音韻史上、唇音退化の傾向が指摘されている。さすれば、表記史上にも、書記努力の面からする同趣の傾向は考え得る所であろう。

[注]

① 「本邦音符考」の反覆音符、『國語國文の研究』所収。

② 「反覆音符」(日本文學大辭典所収)、後に『文字及び假名遣の研究』(橋本進吉博士著作集第三冊)に再収。

③ 國語文化講座卷二。

④ 『訓點資料と訓點語の研究』二三頁。

⑤ 『古點本の國語學的研究・總論篇』六〇五頁。

⑥ 以後院政後半期にはb型が一般的となるが、中には、書陵部藏大乘本生心地觀經卷第八院政末期點の如く、總てa型の資料もある。

在 下、し、こと、ま (一一三行)

盡 こと、久 (九六行)

倍 ま、せ、 (二〇六行)

殆 ほ、と、 (二二六行)

この資料は傍訓に全卷平假名體を用いてあり、訓點資料としても他と異なり珍しいものである。

- ⑦ 高野山 和泉往來補正(訓點語と訓點資料十八輯)
西南院藏
- ⑧ 法華一百座開書抄の二字踊字の起筆位置は大部分が上字の右傍又は右下にあるが、少数下字の右傍にあるものも見られる。これは恐らく、親本が平假名文であったことと關係するものであろう。

(國語學 國文學助教授)

A Postscript to the History of a Repeating Sign

Yoshinori KOBAYASHI

It is already known that the sign " { ", standing for the repetition of a certain Japanese alphabet (*kana*), is derived from the Chinese "善々哉々". The present study has revealed a couple of additional facts about the development of the sign.

First, the starting-point of the sign " { " was immediately at the right of the first *kana*, during the Heian period. After the Kamakura period, it gradually shifted downward and became what it is nowadays in the Muromachi period. This change took place in parallel with that of the times.

Secondly, the transition of the starting-point is attributed to the economy of labour on the part of a writer.